

子どもと保育士のためのナイフワーク

—日常の保育でできる取り組み—

森と木のクリエイター科 木工専攻 高橋 久美子

1. 背景

私は本校入学前、保育士として子どもと関わってきた。「幼児期にナイフを使うことは、体験を通した学びとして有意義」と考える一方で、現状の保育現場ではすぐに実現させることができなかった。入学後、様々な保育園と関わる中で、自分と同じような考えを持つ方が多くいることが分かった。

2. 目的

ナイフを使った活動を日常の保育に落とし込むことを目的とする。子どもの発達・特性に合わせたナイフワークの方法、保育の中で配慮する事項を検証する。

3. 調査

3-1. 幼児教育専門家へのヒアリング

まずは幼児の特性を理解するため、国際モンテッソーリ協会公認教師の深津高子さんにヒアリングを行った。そこで教わった道具の使い方を子どもに示す時の2つのポイントをナイフ指導の方針とした。

- | |
|-----------------|
| ①始めに正しい動作を見せること |
| ②言葉を使わず動作で見せること |

3-2. ナイフワーク講師へのヒアリング

次に、幼児に適した削り方や道具を選定するため、グリーンウッドワークの指導者らに聞き取り調査を行った。先行事例の中から、子どもにとって削りやすい方法と保育に取り入れられそうな道具・教材・環境についての情報が得られた。

まずはこれらを基に実践、検証を進めていった。

4. 実践

4月から美濃市の下牧こども園に協力していただき、子ども向けと保育士向けのナイフワーク講座を毎月一回ずつ実施していくこととなった。対象は、年長児全7名、常勤保育士6名である。

4-1 道具・材料の選定

・道具の選定

木を削ることに焦点をあて、講座には子ども用ウッドカービングナイフを採用した。このナイフは刃先が丸みを帯びており、フィンガーガードにより刃に手が当たりにくいデザインになっている。

4-2. 子どもに合わせたナイフワーク

子どもへの伝え方

ナイフの説明は「言葉を使わず」「ゆっくりとした動作のみ」で示した。言葉の説明が必要な場合は分かりやすい言葉を選び、子どもの理解を促した。（例えば材料を削る際は「木をなでるようにナイフを動かす」とした。）

子ども達は講師の動作を食い入るように観察し、見た通りに削ろうとするが、動作や言葉の説明だけでは理解しきれないことが判明した。

そのため、材料に目安としての目印を付け、視覚で理解できるような教材を準備した。（写真①）



写真① 子どもが視覚で理解しやすい教材

4-3. 保育士へのアプローチ

4-3-1. 保育士講座の検討

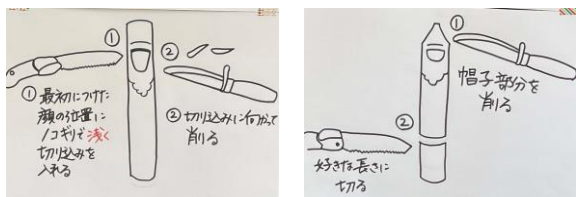
当初、保育士講座は『基本的なナイフ技術の習得』を目指し、子ども講座とは別の内容を実施していた。しかし、その後の子ども講座にて不安から子どもの手をしっかり押さえ込み、「怖い」「危ない」と声を上げる姿が頻繁に見られたことから、『子ども講座で取り組む内容を事前に体験する』形に変更した。保育士からは、「自分が事前に体験することで、子どもに必要なサポートが分かった」という声が聞かれた。

さらに講座を重ねナイフ技術が身についてくると子どもへの関わりに変化が見られ、子どもが削りやすくなるようなさりげない補助や手を出さず見守る姿が見られるようになった。

4-3-2. 手順説明書の作成

7月の講座で、保育士から「途中で手順が分からなくなる時がある」との声があがり、絵で手順を追った説明書(写真②)の作成を行った。説明書

を掲示することで自信を持って製作が進められるようになり、保育士の指導技術がさらに向上した。



写真② 手順説明書

4-4. 道具の開発

大人が木を削る際は自分の体の一部を使い材料を固定させることが多いが、発達途中である幼児の筋力では材料の固定や姿勢の保持が困難であることが分かった。この課題を解決するため、子ども用作業台の開発を行った。

まず初めに、地面に置いて使用する丸太作業台(写真③)を試した。体の正面に材料を置くことで材料の固定はしやすくなったものの、正座や立ち膝の姿勢を保持できず体勢が崩れやすかった。

そこで椅子の上に置き、座った姿勢で使える作業台の検討を行った。その結果完成したのが子ども削り台である(写真④)。丸太作業台と比べ、姿勢の保持が楽にできるようになった。



写真③丸太作業台



写真④子ども削り台

5. 子どもに合わせた作品の考案

講座では子どもの技術習得に合わせ、内容をステップアップさせていった。

子どものリクエストから作品を考案することでモチベーションも上がり、様々な作品を製作することができた。(写真⑤、⑥)



「魚」



「花」

写真⑤子どもと製作した作品-1



「きのこ」



「サンタクロース」

写真⑥子どもと製作した作品-2

「魚」「花」は子どものリクエストから考案した作品である。

6. 考察

講座を通して見えたこと

子ども達は月に一回の体験であっても、講座を重ねるたびに目に見えてナイフの扱いに慣れていった。

子どもの発達・特性に合わせたナイフワークを実現するには、「成長に見合った説明」「活動に合わせた道具の選定」「教材の準備」そして「体験の積み重ね」が必要であることが分かった。

保育の中で子どもが新たな活動を始めるには育ちを支える大人の理解が必要不可欠となる。今回保育士が子ども講座を体験し、ナイフの使い方を理解することで、その後の関わりが大きく変化した。保育士からは「自分が体験することは大事だと実感した。」という感想を頂いた。

また保護者へは毎回写真付きの報告書を通して内容を共有し、これが保育に落とし込む際の配慮として有効であると感じた。

12月の講座では保育士に「日常の保育に落とし込む仕組み」について聞き取り調査を行った。今回の体験が子どもにとって有意義だという認識は共通していたものの、活動する際の保育士の人員確保や技術面での不安はまだ大きいように感じた。

そこで、今後「子どもと活動する際に配慮する事項」や「道具の選定と手入れ」「削り方」「教材や環境づくり」「アイテム製作手順」等をまとめた『サポートブック』を作成し、保育に落とし込む手引きとして使用してもらいたいと考えている。

最後に

私は卒業後保育士として現場に戻り、引き続き子どもナイフワークの実践を行う予定である。

さらなるナイフワークと教材の検討、活動の輪を広げるための場づくりを重ね、日常の保育に落とし込むための仕組みを整備できるよう努めていきたい。